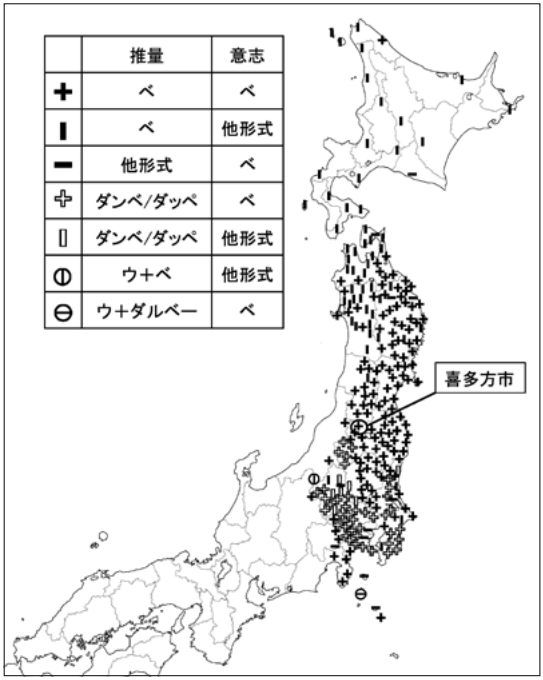
福島県会津平方言のモダリティ形式「べ」
―喜多方市の調査結果から―

舩木礼子（橋本礼子）

1　はじめに

古典語の「ベシ」（ベキ）に由来する現代方言のモダリティ形式「べ」・「べー」は、日本語諸方言においてさまざまな形態的特徴、構文的特徴、意味的特徴を持つに至っている（舩木1999）。本稿では、「べ」・「べー」を推量表現にも意志表現にも用いる諸方言（図の✚印の地域のことば）のうち、福島県会津地方の一都市、喜多方市に注目し、筆者が1997～1998年に行った調査の結果をもとに、「べ」・「べー」の文法的特徴について記述する[1]。福島県喜多方市の方言は、福島県の方言区画でいうと会津平方言に含まれる（菅野1982）。会津盆地の北側に位置し、盆地の南側にある会津若松まで鉄道で約17kmという場所である。



図「べ」類使用地域と喜多方市の位置
（国立国語研究所編1994の第106-114図を総合して作成）

2　調査の概要

本稿で用いるデータは、1997年と1998年に筆者が行った方言の推量表現や意志表現についての面接調査で得たものである[2]。調査は【面接調査の回答者】に示すとおり、当時72歳から33歳の男女10名に行った。また、面接調査の回答者に対して随時行った電話による確認や、調査の場で許可を得て収録した自然談話のデータも記述に用いる。

【面接調査の回答者】

・A　1925年生まれ（調査時72歳）男性
・B　1925年生まれ（調査時72歳）女性※
・C　1931年生まれ（調査時66歳）男性
・D　1937年生まれ（調査時59歳）男性
・E　1937年生まれ（調査時59歳）男性
・F　1941年生まれ（調査時55歳）女性※
・G　1958年生まれ（調査時39歳）男性
・H　1958年生まれ（調査時39歳）女性
・I　1958年生まれ（調査時39歳）男性
・J　1964年生まれ（調査時33歳）女性

※：喜多方市の東南に隣接する塩川町育ちで、結婚後に喜多方に移住した方

面接調査では、筆者が用意した方言翻訳式の調査票を主に使いながら、一部は作例の適格性判断を求めたり、ニュアンスのちがいなどについての内省を求めるなどした。

喜多方市の回答者は「ベ」も「ベー」も「ペ」も用いる。基本の形「ベ」は文末イントネーションで延伸形「ベー」になったり、前接動詞の活用語尾が促音化して異形態「ペ」になったりすることはあるが、意味や用法には大きな違いはないため「ベ」で代表させる。ただし例文の文末や自然談話で得た例は「ベー」や「ペ」と表記することもある。福島県方言にみられる「でしょう・ましょう」相当の「バエ」「パエ」は、推量の「ベ」と丁寧の助詞「エ」との融合形だが、菅野（1982:396）の指摘する通り喜多方を含む会津平方言では助詞「エ」を使わないらしく、この調査でも「バエ」「パエ」は確認できなかった。

また、本稿で例文を示す際は、文脈のわかりやすさを優先し、「ベ」を含む述語の部分だけ方言形式をカタカナで表記し、それ以外の部分は全国共通語形を漢字かな交じりで示す。*は非文法的、?や??は文法的に不自然であることを示す。#は運用上不適切であることや、古い語形として回答者には理解語彙となっていることなどを示す。［　］は文脈などの補足である。

3　喜多方の「ベ」が生起する文法的環境

3.1　文タイプ

「ベ」は平叙文、疑問文で用いられる。命令文では使われない。

(1) たぶんカグベ［書くだろう　平叙文］
(2) あの人、明日のお祭りにイグベガ［行くだろうか　Yes-No疑問文］
(3) あの人、何ヤッテンダベ。［何をやっているのだろう　WH疑問文］
(4) *イケベ［*行けだろう　命令文］

なお、動詞命令形による典型的な命令文と「ベ」は共起しないが、勧誘表現のなかで、話し手はその行為を一緒には行わずに、聞き手だけに当該の行為を行うよう働きかける表現として「ベ」が用いられることがある。これは命令文ではないが〈命令〉あるいは〈勧め〉として機能する。本稿では、こうした話し手を行為者に含まない勧誘表現をexclusive勧誘と呼び、勧誘表現の派生的なものと位置づける（4.8で詳述）。

3.2　形態的特徴

喜多方の「ベ」は、全国共通語の「ダロー」と同様、現在は動詞・助動詞・形容詞の終止形に接続する。「現在は」としたのは、形容詞の場合、かつてはカリ活用連体形に「ベ」が後接していたからである。例えば加藤・半沢・佐藤（1980）には喜多方で「アズガンベー（暑いだろう）」が回答されており、「形容詞の推量は、中通り地方などで終止形にベイのつく「アツイベー」が最近大変多くなっているが、会津の大部分は古形と思われる「アツカンベー」が圧倒的である」と述べられている。しかし、既に菅野・飯豊（1967）が「「アツエベ」などの形容詞終止形接続の形式が最近多く用いるものとしてほぼ福島県全域にみられる現象」と指摘しているように、現在は（5）のように形容詞終止形に「ベ」が接続するようになっている。（5′）のようなカリ活用連体形接続の形式は古い語形だと認識され、誘導なしの第一回答としてはほとんど回答されなかった。

（5）あの靴は値段がタゲーベ

（5′）#あの靴は値段がタカカンベ［古い形式］

ただし、（5）（5′）のような推量の意味では日常的には使わないが、（6）（7）のような確認要求の意味では、調査当時70代の老年層は形容詞カリ活用連体形に接続した形を使っていた。当時50代のDやFも、自分は形容詞終止形接続の形を使うが、明治・大正生まれくらいの老年層は（6）（7）を使うとコメントしている。このことから、形容詞カリ活用連体形に接続する「ベ」は徐々に衰退して形容詞終止形接続に一本化されていくという形態的な変化は確実に起こっているが、推量の意味で使われなくなるのがやや早く、（6）（7）のような確認要求の意味では古い形式である形容詞カリ活用連体形接続の「ベ」が少しだけ長く保たれていたということが指摘できる。

（6）［家族にこたつに入るよう勧める］｛サムイベ／サムカンベ／サンブガンベ｝、早くこたつにあたれよ。

（7）［近所のお年寄りが重そうな荷物を運んでいるのを見て］｛オモイベ／オモタカンベ／オモカンベ｝、お持ちしますよ。

3.3　文内の位置、他形式との共起関係

全国共通語の「ダロー」はその成立過程上、断定形式「ダ」を形式内に含んでいるが、

「ベ」は断定形式を含まない。したがって名詞に直接つくことはなく、断定形式「ダ」に後接する。形容動詞は終止形「-ダ」に後接する。

(8) これはあいつのホンダベ

(8') *これはあいつのホンベ［「本だろう」の意味で］

「ベ」は「ダロー」と同様、過去形式も否定形式も後接しない、つまりテンスの分化がなく否定のスコープにも入らない真正モダリティ形式である。

(9) *イグベタ［cf. *行くだろうた］

(9') イッタベ

(10) *イグベネー［cf. *行くだろうない／*行くだろうでない］

(10') イガネーベ

従属節での「ベ」は、原因・理由節（(11) ガラ）、逆接節（(12) ゲンジョモ／ゲンジョ／ゲンド、ガ）、引用節（(13) ド）などの節内に生起し、時間節（(14) ドギ）や、仮定節（(15) バ、ッカ[3]）などでは生起しない。つまり「ベ」は南（1974）や田窪（1987）のC類のムードのカテゴリーのものであり、文としての独立性の高い従属節に生起するといえる。

(11) あの人も｛イグベガラ／エンベガラ｝、私も行こう。

(12) あの人は｛イグベゲンジョモ／エンベゲンジョモ｝、私は行かない。

(13) 野良猫が家にハインベドモッテ、網戸を閉めた。［「入るだろうと思って」の意］

(14) *来週の日曜日に買い物にイグベドギ、何を買うつもりなの。

(15) *あの人が｛イグベゲレバ／イグベッカ｝、彼は行かないだろう。

主節では、「ベ」や「カモシンネ」などは認識的モダリティの形式として、(16) のように文末に生起する。否定形式の「ネー」の後にも生起する（(17)、前掲 (10')）。(18) のように「カモシンネ」、「ミテダ」などの認識的モダリティ形式の後に「ベ」が生起することも可能だ（確認要求の意味で使用する）。

「ベ」の後に付くのは (19) の疑問の「カ／ガ」、(20) の丁寧の「シ」のほか、「ナ」、「ヨ」、「チャ」などの終助詞である。(21) のように「ベ」が「カモシンネ」、「ミテダ」などの認識的モダリティの形式の前に生起することはないので、「ベ」は事態として扱われにくいものであるといえる。

(16) 明日は雨が｛フルベ／フンベ／フッカモシンネー／フルミテダ｝

(17) 明日はフンネーベ

(18) 明日は雨がフルカモシンネーベ

(19) 明日は雨がフルベカ

(20) 今度はスワンベシ（座るでしょ？）

(21) *明日は雨がフルベカモシンネ

また、全国共通語や他方言では「ダロー」や「ベ」が多少不自然ながらも連体節で用いられることがある[(4)]が、喜多方の「ベ」は連体節には生起しない（（22））。また、（23）のような提題のハとの共起関係もなく、準体句としての使用はない。

(22) *雨がフルベ時は、運動会は中止だ。

(23) *自分だけニゲルベは、よくないぞ。

なお、否定事態の推量には（24）のように否定形式に「ベ」が後接した形が、否定意志には（25）のような否定形式言い切り形が使用される。「マイ」由来の否定の意志・推量融合形式「メー」（（24'）（25'））は古い形式として現在ほぼ使われなくなっている。

(24) あいつはイガネーベ

(24') #あいつはイグメー［古い形式、理解語彙］

(25) おれはイガネー

(25') #おれはイグメー［古い形式、理解語彙］

3.4 生起する環境のまとめ

喜多方の「ベ」が生起する環境については以下のようにまとめられる。

(a) 文タイプ：平叙文・疑問文に生起する。命令文には生起しない。

(b) 活用：活用はない。終止形「ベ」（または延伸形「ベー」、異形態「ペ」）のみ。

(c) 接続：動詞や形容詞には、現在は終止形に後接する。形容詞についてはカリ活用連体形に「ベ」が付くことが確認要求の場合に老年層にだけみられるが、中年層以下はほとんど使わない。名詞述語文では断定形式「ダ」に「ベ」が後接する。

(d) 前接要素：否定形式の「ネー」、モダリティ形式「カモシンネー」などに「ベ」は後接可能。

(e) 後接要素：「ベ」の後に終助詞「カ」、「ナ」、「ヨ」、「チャ」、丁寧形式の「シ」などが後接可能。否定形式、過去形式や、「カモシンネー」などのモダリティ形式は後接不可。

(f) 従属節内のふるまい：「ベ」は原因・理由節（ガラ）や逆接節（ゲンジョモなど）、引用節（ド）などには生起するが、時間節、仮定節には生起しない。

(g) 関連する形式：否定と意志・推量の融合形式「メー」は、古い形式と認識されており、使わなくなっている。

4 推量表現や意志表現の用法

喜多方の「ベ」には多岐に渡る意味・用法がある。

以下、推量表現として用いられる「ベ」の平叙文の用法としての推量（4.1）、疑問

文での用法（4.2）、感動詞化した「ナンダベ」（4.3）について述べ、そして確認要求（4.4）と確認要求の拡張用法（4.5）とについて記述する。

また意志表現として用いられる「ベ」について、意志（4.6）、勧誘（4.7）、勧誘の拡張用法（4.8）について述べる。

4.1　推量

喜多方で用いられる「ベ」の用例の多くは、全国共通語の「ダロー」に置き換えられる。平叙文において、この推量の表現として用いられる「ベ」は以下のようなものである。

（26）あの人は明日のお祭りにイグベ。

（27）あの人は先月のお祭りに｛イッタベ／イッタッタベ｝。［過去推量］

（28）あの人は明日のお祭りにはイガネーベ。［否定推量　cf.（24）］

（29）あの人は先月のお祭りにはイガネガッタベ。［否定過去推量］

これらの「ベ」は、話し手自身の判断を聞き手に伝えるための発話にも、話し手が独り言としてもらす発話にも現れる。つまり、推量用法の「ベ」は、話し手・聞き手間の情報伝達のあり方としては、聞き手の持つ情報については考慮せずにあくまで話し手の持っている情報によって話し手が行う判断を表すものといえる。

否定推量表現には、3.3で述べたとおり、かつては「マイ」に由来する「メー」が用いられていたが、この調査では「メー」は古い形式と認識され、老年層にも用いられていなかった。否定推量の場合は否定形式「ネー」に「ベ」が後接した形を用いる。

また、古典語のベシ（ベキ）に由来を持つ全国共通語の「ベキダ」は当為の意味に偏っているが、喜多方の「ベ」は（30）のように価値判断（当為評価）を表さない。当為には（30'）のように「ヤンナンネー」[(5)] を用いる。

（30）*自分でできることは、自分でヤルベ［「やるべきだ」「やらねばならない」の意味で］

（30'）自分でできることは、自分でヤンナンネー

なお、この推量用法に対し、推量という心的活動でありながらその発話が聞き手めあてになされている場合、話し手は聞き手に対して自分の判断を伝えるだけでなく、何らかの働きかけを行っていることがある。これは確認要求用法として4.4で述べることにする。

4.2　疑問文における「ベ」

喜多方の「ベ」は疑問文と共起する。Yes-No疑問文では（31）のように終助詞「カ／ガ」あるいは「カナ／ガナ」が義務的につく。疑問詞疑問文では（32）のように「カ／ガ」の付加は随意的だが、つけないのが自然であるという。単なる疑問・質問の表現は（31'）（32'）のように「ベ」なしでも成り立つ。

(31) あの人、明日のお祭りに ｛イグベガ／イグベガナ｝ 。［(2) 再掲］

(31') あの人、明日のお祭りに ｛イグガナ／イッカナ｝ 。

(32) あの人、何 ｛ヤッテンダベ／?ヤッテンダベガ｝ 。［(3) 再掲］

(32') あの人、何 ｛ヤッテンダ／ヤッテンノガナ｝ 。

森山（1989）に、全国共通語の「ダロー」が疑問文に生起して聞き手の持っている情報について配慮しない表現として用いられることが指摘されているが、喜多方の「ベ」もこれと同様の性質を持っていると考えられる。典型的な疑問文は、当該情報に関して話し手よりも聞き手（質問される相手）が確定情報を多く持っているということが発話の前提となり、話し手には不明な事態の真偽を聞き手に答えさせたり、話し手には不明な部分を聞き手に補充させたりすることになるが、疑問文に「ベ」や「ダロー」が生起すると、話し手が積極的に聞き手のもつ情報を要求するという本来の疑問文（質問）の意味が希薄になり、聞き手めあて性が弱まるのである。話し手が自分の疑問（不確定な内容）を、「ベ」や「ダロー」でただ話し手が推し量って述べただけの表現として発して聞き手に聞かせるという発話の方法は、聞き手に直接問うてはいないが、聞き手に聞こえ、聞き手がその答えを知っているならば答えればよいという、聞き手に判断を委ねたまわりくどい表現となる。聞き手に決定権がある点で丁寧さが増し、婉曲な表現だと捉えられる。

こうした「ベ」や「ダロー」の性質から、典型的疑問文、すなわち話し手の直接経験ではない事態あるいは未実現の事態について、話し手は不確定情報しかもっておらず聞き手は確定情報を持っている場合（情報量が話し手<聞き手の場合）に、話し手が聞き手に不確定情報の補完や真偽判断を求める文には、「ベ」は使用できないことが説明できる。

(33) ［家族が、押入でなにやらゴソゴソしている］おまえ、 ｛*ナンシテンダベ／ナンシテンダ｝ 。

(34) ［友人が見たこともないものを持っている］ ｛*ナンダベ／ナンダ｝ それ。

(35) お前の名前の漢字、お礼の「礼」の字 ｛*ダベガ／ガ｝ 。

(33) (34) (35) は、話し手が知らないことを、よく知っているはずの聞き手に質問する文なので、聞き手めあて性を弱めてはいけない。だから「ベ」が使えない。

一方、(36) のようにお互いに事態の確定情報を持っていない場合は、Aの発話の疑問文に「ベ」を付けて発話できる。

(36) ［AとBが夜道をのんびり散歩している。お互い、時計は持っていない。］

A：今、 ｛ナンジゴロダベナー／ナンジゴロナッタベナー｝ 。

B：さあー。 ｛ハチジゴロダベナー／ハチジゴロナッタベカー｝

また、全国共通語の「ダロー」と同様に、話し手が知らないことを聞き手に尋ねる場面のうち、聞き手めあて性を弱めて話し手の自問自答とも捉えられる発話にすることで相手に回答の決定権を与えた (37) のAのような疑問文にも、「ベ」を付けることができる。

(37)［Aは腕時計を忘れてきたが、Bは恐らく時計を持っていると思われる。］
A：今、｛ナンジ／ナンジナッタヨー／ナンジダベ｝。
B：今、3時だよ。

4.3 感動詞化した「ナンダベ」

疑問文における「ベ」には、例外的なものとして「ナンダベ」という慣用的な形式が観察される。疑問詞と結びついた「ナンダベ」は、疑問詞と共起しつつ聞き手めあてに用いられるが、聞き手に不明部分の補充を求める疑問文として使っているのではない。調査のときに、花瓶を割った家族にどんな反応をするかを演じてもらったところ、「ナンダベ」が（38）（39）のように使われていた。

(38)［花瓶を割ってしまった人に］ナンダベ　カビンワッテー［なんだい、花瓶を割って］

(39)［花瓶を割ってしまった人に］コーンナニ　カビンワッツマッテ　ナンジョスンダベ［こんなに花瓶を割ってしまって、どうするの］

疑問詞と推量表現形式が結びついて驚きなどを表す慣用表現になっている例は、（40）のように「ベ」を推量表現に用いる他方言にも確認でき、（41）のように全国共通語でも見つかる。

(40) エッショーケンメー　アルッタッケ　ナンダベー　ハルサーンテ　コエ　カゲラッテ［以下略］［一生懸命に自転車を動かしていたら「なんだ　春さん」って声をかけられて］（『方言談話資料（5）』宮城県亘理郡荒浜、146頁）

(41) ついでだが、四、五日まえにリジェント街のマンフィルドで買ったばかりの新しい靴なのだ。『まあ！何でしょう？あなた自分で入れたんじゃないわね！こんなところへ水を。』『莫迦な！誰が靴へ水をつぐやつがあるものか。知らないよそんなこと。』（谷譲次（1999）『踊る地平線（上）』岩波書店より[6]）

小林・勝又（2022）は、こうした慣用的な「ナンダベ」を感動詞として扱い、全国的な分布に加えて、各方言の「ナンダベ」がどのような意味の感動詞なのかについて語用論的な説明を行っている。小林・勝又（2022：352）の図2によると、感動詞「ナンダベ」を使用している地域は宮城県を中心として岩手県南部や福島県北部、山形県南部（置賜地方）などであるが、回答数は少ないながらも北関東から秋田県南部あたりまで広く使用されることがわかる。また地域によって少しずつ感動詞としての意味がずれていることについて、原義である「何だろう」といった疑問用法から、「理解しがたい」という「感動」を表すものへ発達し、そういった理解しがたい事態が「受け入れがたい」こと、さらには「受け入れがたく反発する」ことまでを表すようになるという感動詞化の発達過程を想定し、各

地の形式がそれぞれの段階にあたると説明している。

喜多方での1997・1998年の調査では、「ナンダベ」について面接調査で適格性を尋ねたところ、世代によって判断が異なっていた。老年層（当時70代）は「ナンダベ」を聞き手に直接用いるのは運用上不適切だとし（（42）（43））、中年層（当時50代）は適格だと判断した（（44）（45））。つまり当時の70代回答者にとって「ナンダベ」はあくまで推量と疑問の文なので、聞き手に直接質問する用法や、感動詞相当の用法（疑問ではない用法）では使えないのだが、中年層は感動詞として用いていると考えられる。

（42）［家族が、押入でなにやらゴソゴソしている。声をかけると、その人がホコリで真っ黒になった顔を押入から出した。その顔を見て］ ｛ナンシタノ／ナンシタンダ／#ナンダベ｝ おまえ、真っ黒な顔して。（70代）

（43）［散歩をしていると、大急ぎで走っている友達に出会った］ ｛ナンシタノ／ナンダヨ／#ナンダベ／#ナンシタベ｝ ○○さん、そんなに急いで。（70代）

（44）［家族が、押入でなにやらゴソゴソしている。声をかけると、その人がホコリで真っ黒になった顔を押入から出した。その顔を見て］ナンダベ、おまえ、真っ黒な顔して。（50代）

（45）［散歩をしていると、大急ぎで走っている友達に出会った］ ｛ドーシタノ／ドーシタンダン／ナンダベ｝ ○○さん、そんなに急いで。（50代）

4.4　確認要求

本稿では、全国共通語の「ではないか」や「だろう」などを分析した田野村（1988）、三宅（1994、1996）、宮崎（2000）を参考にし、確認要求表現を（46）のように分類することにする。

（46）確認要求表現の分類

a.　知識確認の要求：潜在的共有知識の活性化

b.　知識確認の要求：認識の同一化要求

c.　命題確認の要求（デハナイカⅡ類）

d.　命題確認の要求：強い見込み

e.　ダロウネ／ノデハナイダロウネ（当為性判断を基底に持った表現）

喜多方の「ベ」はこれらの確認要求表現のうち、a、b、c、dに用いられる。「ベ」と並んで「ベシタ」という形式も使われている（（47）（49））。上昇調、下降調のどちらもある。eは全国共通語では「宿題、ちゃんとやっただろうね」や「さぼったんじゃないだろうね」などのように「ダロー」が使われるが、喜多方では未調査で「ベ」で言えるかわからない。

（47）昔はほら、長男しか嫁モラワネガッタ ｛ベ／ベシタ｝ ［もらわなかったでしょう］［46 a.知識確認の要求：潜在的共有知識の活性化］

(47)

(48) ［戸を閉めていない人に注意する］シメネト　ダメダベー［46b.知識確認の要求：認識の同一化要求］

(49) ［皆で花見の計画を立てているときに、聞き手に「もちろん行く」という返事を期待して尋ねる］おまえも当然｛イグベ／イグベシタ／イグンダベ｝［46c.命題確認の要求］

(50) ［家族にこたつに入るよう勧める］｛サムイベ／サムカンベ／サンブカンベ｝、早くこたつにあたれよ。［46 d.命題確認の要求：強い見込み］

斎藤（1982）は山形方言の「ベシタ」について、「ベ」と終助詞「シタ」が融合してできたものだと説明している。喜多方で頻用される「ベシタ」もなんらかの終助詞が「ベ」と融合したと想定できるが、回答者の感覚では「ベシタ」を融合以前の形式に分解することはできないため[7]、文末の一形式として扱う。

喜多方の「ベシタ」は年齢、男女の別なく使用されている形式だが、女性が多用する傾向がある[8]。この「ベシタ」は確認要求専用の形式であり、推量用法としては使えない。

(51) ［独り言で］明日はたぶん｛アメダベナー／*アメダベシタ｝。

また確認要求表現のなかでも、喜多方の「ベシタ」は実際に聞き手に対して確認を求める（46a）知識確認要求（潜在的共有知識の活性化）（前掲例文（47））と、（46c）命題確認要求（デハナイカⅡ類）（前掲（49））に使用できるものである。（48'）などの（46b）知識確認の要求（認識の同一化要求）では、話し手は聞き手に回答を求めておらず、聞き手は話し手の認識を受け入れるしかない。この場合、判断が難しいようで、「ベシタ」を自然に使えるという回答は得られなかった。また（50'）のような（46d）命題確認の要求（強い見込み）では、話し手は命題部に強い見込みを持っており、聞き手がこの命題について話し手と同じように認識しているのかを確認しようとはしていないため、「ベシタ」が使えないのだろう。話し手は見込みを提示することで、話し手側の主張や行為指示（例えば（50）（50'）ではこたつに入るよう勧めること）を聞き手に受け入れさせている。

(48') ??ダメダベシタ、そんなことしちゃ。［46b.知識確認の要求：認識の同一化要求］

(50') *そこはサムイベシタ、こっちに来てこたつにあたれ。［46d.命題確認の要求：強い見込み］

つまり喜多方の確認要求の専用形式「ベシタ」は、確認要求表現のうちの聞き手に確認の返答を求める用法だけを担うものだと考えることができるだろう。

なお、山形市方言の確認要求表現に関する渋谷（2001）によると、山形市の「ベシタ」は三宅（1994、1996）の「知識確認の要求」（前掲46a、46b）にのみ用いられ、（46c）命題確認要求（デハナイカⅡ類）の例文では「ベシタ」が不適格となっている（山形市の

ベシタが上昇調にならないこととも関係するという）。

また、「ベ」と全国共通語の「ダロー」との違いに目を向けると、小さな違いかもしれないが、（52）のような繰り返しの使用の可否が挙げられる。喜多方では、老年層も中年層も（52）で「ズルイベ」を繰り返して言うことに不自然さはないという。全国共通語の「ダロー」でも言えないことはないが、二度繰り返して使うとやや不自然に感じる。

（52）わあ、ズルイベ、ズルイベ、僕がいない間にメロンなんか食べて！［46b.知識確認の要求：認識の同一化要求］

（46b）知識確認の要求（認識の同一化要求）は、例えば「何をするんだ。そんなことをしたら危ないだろう。」や「そんなに驚くことないだろ？」など、命題として示す話し手の認識（「ずるい」や「危ない」、「そんなに驚くことない」）が聞き手には認識されていないと思われる状態のときに、聞き手にも話し手と同じように認識させようとするものである。話し手と聞き手の間に認識の違い（ギャップ）があることが前提となるので、話し手から聞き手に向けて、同じであるべき認識に至っていないことへの不満や怒り、あきれなどの感情も伝えられることになりやすく、一度言えばかなりの強制力で聞き手に認識させたり、話し手の感情を意識させたりすることになる。そのためか、「ダロー」のあとに聞き手の反応を確認する「間」がとられるのが一般的だと思われる。しかし喜多方の「ベ」は（52）のように「間」をとらずに繰り返せるので、「ダロー」ほどは聞き手の反応を気にせずに使え、終助詞「ヨ」のように話し手の認識を聞き手に押しつけるものに近いのかもしれない。

推量表現形式による確認要求表現を、会話で推量表現を対人的に使うことによる派生的用法であるととらえると、方言間にみられる確認要求用法の範囲の異なりは、推量からの派生（あるいは逸脱）の程度、換言すると聞き手めあての用法の文法化の諸段階が現れているものと考えられよう。

4.5　確認要求の拡張用法

井上（1985）は、「ベ」が活用を失ったことに加え、用言終止形接続になったという点を捉えて、「ベ」の「終助詞化」を指摘している。この次に予想される段階として、用法面でも従来の意志・推量などの意味には収まらない、終助詞が担うような意味の出現が予想される。自然談話を見ていると、確かに、推量や確認要求とは言いがたい用例が確認できる。

（53）J：サイショイ　サイショ　ワリートモッテナー　イワネーノ　ゴハンダヨー　ゴハンダヨー　ツッタベシタ［（Jの職場の老人ホームで）最初は悪いと思ってね、（相手の老人に「マンマだ」とは）言わないの。「ごはんだよ、ごはんだよ」と言ったのよ］

(49)

G：［笑いながら］ンー

J：［語気を強めて］マンマダーッ［（最後には、やさしく気取って言っていられなくなり）マンマだーっ（と言ったよ）］

(54) J：［他の人はまだ食べたことのない話題の食べ物について］ダンナト　クッタケガ　タンネベ　イヤー　カップラーメン　ニハイ　クッタノト　オンナシダーッツッテ［旦那と食べたけど（量が少なくて）足りないよ、いやー、カップラーメン二杯食ったのと同じだと言って］

Gほか同席者：［笑］

これらの用例は、聞き手Gたちが知らない話し手Jの経験について、話し手が情報を一方的に聞き手に与えているので、これらの「ベ」や「ベシタ」は推量用法とも確認要求用法ともいえない。意味的には推量の枠内では論じられないものになっているといえる。(53)（54）などの「ベ」「ベシタ」は形式的な面だけでなく、意味的にも「推量の助動詞」からの逸脱を指摘できるだろう。

こうした「ベ」「ベシタ」の例は、イントネーションが上昇調であることが多く、聞き手はあいづちを促されるが、発話のターンがこの「ベ」「ベシタ」で交代することはない。また「ベ」「ベシタ」の次の発話はさらに展開した内容、例えば話題のオチや、原因に対する結果などが続くように思われる。こうした観察の補強となる内省として、たとえば福島市出身の男性[(9)]は、こうした「ベ」を使用するのは必ずその新情報を前提にした話を次に続けたいときであるという。つまり、発話のターンを聞き手に渡さずに、現在の話題がまだ続くことを示す談話機能マーカーとして「ベ」や「ベシタ」が機能し始めていると考えられる。

こうした「ベ」の用法は、確認要求用法が徐々に拡張したものではないかと考えている。つまり、例えば三宅（1994、1996）のいう「知識確認要求」は、換言すると話し手が真と認識している命題について、聞き手のなかで、既に聞き手のもっている（と思われる）知識を活性化させ、聞き手にも真であると認識させる（あるいは真であったことを思い出させる）ものだが、この「既に聞き手のもっている知識を活性化させる」・「思い出させる」という限定がとれ、聞き手に新知識を導入し、これを話し手と共有の命題だと認識させるものとしても機能し始めたと考えるのである。文末イントネーションが上昇調であることも、確認要求の「聞き手に確認する」機能を残したものと捉えられるので、この考えの補強となるだろう。こうした意味的拡張が、談話マーカーとしての機能も新たに獲得し、先に述べたようにターンを維持し次の発話で話題のオチや帰結などについて述べることを予測させるものとなったのではないだろうか。

他の方言では、全国共通語の「ではないか」に相当するような意味をもつ確認要求表現形式が、新情報の導入にも用いられるようになっていることが報告されている（浅尾2001、朝日2001、松丸2001、玉懸2001など）。こうした意味・機能の拡張が、推量の意味から派

生した、推量表現と同じ形式の確認要求表現形式にも生じているならば、確認要求表現の全体像を捉える上で重要な事例といえるだろう。

4.6　意志

喜多方の「ベ」は一人称主語が動作主でもある文で、述語に意志動詞をとるときに意志用法となる。否定形はかつては「マイ」由来の「メー」を使ったと思われるが、理解語彙となっており、基本的に動詞否定形、または動詞否定形に「ベ」を後接した形式を用いる。

(55)　［風邪をひいて家で休んでいるとき、独り言で］明日は必ずイグベー。

(56)　［独り言で。夜も更けてきたので］さて、そろそろネンベー。

(57)　［大晦日に家族みんなで団欒している。皆はまだ夜更かしするようだが、自分はもう床につこうと思い、コタツから出ながら］私はそろそろネンベー。

(58)　［果物は孫の好物なので孫に取っておきたい。私は食べるまい（食べないでいよう）と言うとき］果物は｛クワネーベ／#クーメー｝。

「ベ」による意志表現は（59）のように「と思う」の構文の中に埋め込むこともできる。

また（59'）から、常に聞き手との対話の状況でしか使用できない「ヨ」などの終助詞とは異なり、「ベ」は心内発話的にも使用可能な、聞き手の存在が不可欠ではない形式だといえる。

(59)　私もあの時は、明日は必ず｛イグベ／エンベ｝ドモッタンダ［行こうと思ったのだ］

(59')　*私もあの時は、明日は必ず｛イグヨ／イグベヨ｝と思ったのだ。

なお、意志表現としては「ベ」を使用しなくても成り立つ。特に、独り言の場合は動詞終止形に「カ」「カナ」をつけていうことが多い。

(59")　あの時は、明日は必ず｛イグベ／イグ｝と思ったのだ。

(56')　さて、そろそろ｛ネンベ／ネッカー｝。

(60)　昨夜、［おれが］｛ネンベ／ネッカ｝と思ったら、むかでが出たんだ。

またこれと関連して、聞き手との対話の中で、聞き手の働きかけに対する応えとして自分の意志を表明する場合は「ベ」を用いないのが一般的である。

(61)　［手紙を書くよう催促されて、聞き手に］明日｛カグ／カッカラ／#カグベ｝。

(62)　［家の人に、早く出かけなさいと注意されて］今すぐ｛イグ／イッカラ／#イグベ｝。

（61）や（62）の文脈で「ベ」を用いると、働きかけている相手を無視した独り言や勧誘のように感じられるという。もっとも、働きかけに対する応えとしては、（61'）（62'）のように全国共通語でも「ウ／ヨウ」は使用しづらい。

(61')　［手紙を書くよう催促されて、聞き手に］#/?明日書こう。

(62') ［家の人に、早く出かけなさいと注意されて］#/?今すぐ行こう。

また喜多方では（63）で動詞終止形が使用できないこと[10]から、動詞終止形による意志表現は埋め込みでは使用できないことがわかる。

(63) *昨夜、［おれが］ネルと思ったら、天井からむかでが落ちてきたんだ。（cf.（60））

一方、以下の（64）（65）の場合は、（61）などの意志表現より「ベ」を使いやすいという。これらの文脈が、話し手自身のこれから行う行為についての聞き手への説明であり、説明をすることによって聞き手との関係を保てる（説明をしなければ聞き手に失礼になる可能性などがある）ことから、こうした話し手自身の行為説明の場合は「ベ」を使って未実現の行為を表明して、話し手がその行為を確定したことだとは認識していないことを示すのだと考えられる。

(64) ［禁酒中の聞き手が、花見の世話役なのでお酒をすすめてくれた。聞き手は飲まず、話し手だけが飲むとき］では、せっかくだから｛ノムベ／ノムガナ｝。

(65) ［家族で菓子を食べているのだが、その場にいない孫はその菓子が好きなので、学校から帰ったときのために取っておいてやりたいと思う］アー　オレノブン　ヒカエテオグベー　アノ　マゴサ　クッ　ヨロコブガラー　ヨケーニ　ヤンベー［ああ、私の分は控えておこう。あの、孫に、［言いさし］（孫が）喜ぶから、多くあげよう。］

また、聞き手からの要請の有無に関係なく、ある行為を話し手のほうから聞き手に申し出る場合（以下「申し出」と呼ぶ）にも「ベ」が使われやすいという傾向がみられる。

(66) ［聞き手が、お菓子の缶のふたが開かないという］どれ、私が｛アゲテミンベ／アゲテミッカ｝。

(67) ［町内会の役員を決める場面。だれもやりたがらないので］じゃあ、しょうがない、私が｛ヤンベ／ヤッカラ｝。

申し出の場合に「ベ」が使われやすいのは、まず、話し手がその行為を遂行しようとしているということを聞き手にはっきりと知らせる必要がある点で、申し出ではない意志表現と異なっていることが理由として考えられる。申し出以外の意志表現の場合、未実現の事態の実現を願っているのも動作の主体となるのも話し手自身であり、話し手以外にその意志表明をする必要性は少ない。

また、申し出は多くの場合、その行為が聞き手には実現できないことであるからこそ話し手がその遂行を申し出ているのであり、運用上、動作主体が必ず話し手に限られる。つまり、その状況で「ベ」を用いても勧誘用法とはとられにくいという運用上の条件が関わっていると考えられる。

4.7　勧誘

喜多方の「ベ」は（68）（69）のように勧誘表現にも用いられる。

（68）［明日のお祭りに行くかどうか悩んでいる友人に］ねえ、一緒にイグベ。

（69）［なかなか寝ない孫に］さあ、じいちゃんと一緒にネンベ。

このとき（69'）のように、特に女性の発話で、丁寧を表す「シ」が「ベ」に後接することが多い。

（69'）［なかなか寝ない孫に］さあ、ばあちゃんと一緒にネンベシ。

なお勧誘は、動作主体として話し手を含むか（inclusive）、話し手を含まないか（exclusive）という視点で二分できる。このexclusive勧誘については4.8で詳しく扱う。

働きかけという点では、4.4で扱った確認要求表現も聞き手に対する働きかけがその機能の中心だ。しかし、確認要求表現が、（70）のように聞き手のもつ情報を話し手が推量し、その情報を持っているかを確認することや、その情報をいま認識することを聞き手に求める表現であったのに対し、勧誘表現の場合は聞き手の意志を話し手が推量するわけではなく、（71）のように話し手の意志のみを主張し、その結果として話し手の発話が聞き手の意志決定に関わるという働きかけになっているといえる。

（70）明日のお祭り、おまえも一緒にイグベ。［確認要求：「聞き手も明日のお祭りに一緒に行く」ということを推量し、その真偽を聞き手に確認している。「行くだろ？」と同義。］

（71）明日のお祭り、おまえも一緒にイグベ。［勧誘：聞き手は明日のお祭りに行くかどうかわからないが、「聞き手にも話し手と一緒に行く」ことを実現してほしいという話し手の意志を主張し、聞き手にその行動を求めている。］

4.8　勧誘の拡張用法 ― exclusive勧誘 ―

「ベ」は命令形とは共起しないが、以下のように命令表現として用いられることがある。

（72）［子どもに対して］遅れるよ。早く学校へイグベ

（73）［自分はまだ起きているが孫には寝てほしい場合に、孫に対して］○○ちゃん、もう寝ンベナー

こうした意志･勧誘の表現形式による命令用法は、聞き手を動作主体とし、かつ話し手自身は動作主体でないことから、exclusive勧誘と呼んでおく。実際には聞き手だけに当該行為を遂行させるのだが、意志・勧誘表現形を用いるため話し手も当該行為を一緒にするかのような表現となるので、動詞命令形よりも「優しい」と内省される命令表現になっている。これは、全国共通語の「ウ／ヨウ」が動作主体として話し手自身を含まない場合に命令表現として機能することと同じ現象であるといってよく[11]、勧誘表現の拡張用法と考えられる。（74）のように聞き手のみを明確に動作主体に指定する命令表現には、勧誘用法の拡張である「ベ」は用いられない。

(74) ［家の軒に蜂の巣ができているのを見つけて］

A：おまえ、｛トレヨ／*トルベ｝。

B：いやだよ、おまえが｛トレヨ／*トルベ｝。

喜多方の「ベ」のexclusive勧誘用法とは以下のようなものだと考えられる。

まず、動作主体に話し手を含んだ、勧誘表現に近い例として（75）がある。

(75) ［映画館で前の席の人がうるさい。その人の肩をつついて］もうちょっと、静かにミンベナー。

（75）は、既に話し手が静かに映画を見ている状況で、聞き手に「静かに見ること」を求めるものである。この例文は、話し手と同じ行為をするよう聞き手に働きかける点では勧誘表現といえるが、話し手が既に行っている行為について新たに聞き手にその行為の遂行を求める、つまり聞き手のみが新たな行為を遂行するという点では、命令表現といえる。

次に、動作主体として話し手を含まない例（76）（77）を考える。

(76) ［話し手は訳あって禁酒中だが、花見の幹事なので宴会の席にいる。周囲の人に酒を勧めるとき］さあさあ、どんどんノムベ。

(77) ［自分はまだ起きているが孫には寝てほしい場合に、孫に対して］○○ちゃん、もうネンベナー。［（73）再掲］

これらの例では話し手は動作主体ではなく、話し手が実現しようとする事態（行為）を遂行するのは聞き手に限られる。あたかもその行為を話し手が一緒に遂行するように聞き手に働きかける勧誘の表現形式を用いながら、実際は聞き手だけにその行為をさせる点で、「飲め」や「寝ろ」などの命令形よりも「優しい」と内省される命令表現になっている。また、

(78) ［子どもに対して］トイレぐらい一人でイグベ。

(79) ［子どもに対して］遅れるよ。早く学校へイグベ。

のように、大人が子どもや孫に対して、あるいは先生が生徒に対して言うような、命令の内容について話し手が一方的に正統性や妥当性をもっている場合に使用されることが多い点も注目される。ただし、求められる行為自体は妥当なものであっても、動詞命令形と同様に、語用論的に命令自体が使用しにくい目上の人物に対しては運用上不適切である。

(80) ［急に雨が降り出したとき窓際にいる子どもに対して］雨が入るから早く戸をシメンベ。

(80') ［急に雨が降り出したとき窓際にいる親に対して］#雨が入るから早く戸をシメンベ。

また、（81）は怒鳴っている場合、つまりかなりの強制力を行使してその行為をさせようとしている場合は「ベ」が使いにくいことを表している。「ベ」は事態の実現を聞き手に強制する度合いが動詞命令形による命令表現より弱いといえる。

(82) ［親が子どもに対し、怒鳴って］トイレぐらい一人で｛イゲ／#イグベ｝。

5　証拠性判断・蓋然性判断・当然性判断

推量に隣接するさまざまな認識的モダリティについて、方言翻訳式で使用形式を確認した結果を示す。

喜多方では証拠性判断（様態）に「ソーダ／ソダ」「ミテーダ／ミテダ」、蓋然性判断（可能性）に「カモシンネ」を用いる。（83）と（84）についてはどちらも「明日は雨が降る」ということを推論する例文で、推論の根拠（証拠）を指定せずに全国共通語形を方言形に訳すよう求めただけだったため、提示した語形に誘導された「ソーダ」や、どちらにも使える「ミテーダ」が主に回答された。「ヨーダ」などは回答を得られなかった。

（83）［「明日は雨が降るようだ」と話すとき］明日は｛フルミテダー／雨フンゾー／雨ダベー｝

（84）［「明日は雨が降りそうだ」と話すとき］明日は｛雨にナリソーダナ／雨フリソダナー／雨フッカモシンネーナー｝

（85）［説明を受け、もうちょっとでわかりそうなとき］もうちょっとで｛ワカリソーナダゲンジョ／*ワガルベゲンジョ｝

（86）［「明日は雨が降りそうにない」と話すとき］明日はフリソーモネーナー

（87）［「明日は雨が降るかもしれない」と話すとき］明日はフッカモシンネーナー

ほとんどの回答者は（83）について、様態の「ミテダ／ミテーダ」や動詞非過去形「フンゾー」［降るぞ］を答えているが、「ベ」で表現してもおかしくはないという。基本的に「ベ」は証拠性判断（様態）を表すわけではないが、推論を行って見込みを示す点で隣接した表現であるためだろう。一方、目の前で今にもその事態が実現しそうになっていることを表す将前の意味の（85）は「ベ」が不適格だ。このほか（88）でも、将前の表現としての「ベトスル」は使われない。なお30代では（88）のように「サコートシテル」を回答する者もおり、共通語化が伺える。

（88）［花が今にも咲きそうなとき］もうすぐ｛サクゾ／サキソーダヨ／サコートシテル／*サクベトシテル｝

なお、（84）は「（雨が）降る」という無生物動作主・無意志動詞の例文なのだが、G・H・J（当時30代）は（84'）のように「降りたがる」に相当する「フッチ」を用い、様態性を「ミテーダ」あるいは「ガル」によって示す回答もしている。

（84'）［G・H・Jの回答］フッチミテーダ［降りたがっているみたいだ］／フッチガッテル［降りたがっている］

全国共通語の蓋然性判断「違いない」や、当然性判断「はずだ」に完全に対応する語はないようだ。（89）（90）に示すとおり、回答者A・B・C（当時60-70代）は方言翻訳が困難だったらしく無回答であった。D・E・F（当時50代）やG・H・I・J（当時30代）は、それぞれが方言ベースの会話で使ってもおかしくないと思っている形式を回答してくれた

が、回答がばらけており、全国共通語と対応置換できるような決まった表現は「チゲーネー」以外はないようだった。

(89)［「明日は雨が降るにちがいない」と話すとき］

A・B・C（60-70代）：無回答

D・E・F（50代）：雨にチゲーネー

G・H・I・J（30代）：G無回答／Iたぶんフッゾー／HJ　フンジャネー

(90)［「明日は雨が降るはずだ」と話すとき］

A・B・C・D・E・I：無回答

F：雨にナルミテーダヨ

G・H・J：今日はフンダー／今日はフル

6　価値判断（当為評価）

「ベ」に関連するものとして、価値判断（当為評価）のモダリティのうち、適当の「べきだ」について確認するべきだろう。

喜多方では「ベキダ」は方言形としては使わない。「ベ」も当為評価の適当の意味では使用しない。代わりに（91）以下に示すような「ならない」相当の形式「ナンネー」を使用する。老年層は副詞「ナンデカンデ」を付けることが多いとコメントしている。「すべきでない」は、「ヤランニェー」や「ヤランニェガッタ」のように「レル／ラレル」の否定形を用いる。なお30代は「ニェ」の発音が「ネ」になることもあった。

(91)［運動をすべきだ］ナンデカンデ運動ヤンナンネーヨ

(92)［運動をすべきでない］運動｛ヤランニェーヨ／ヤランネーヨ｝

(93)［運動をすべきだった］運動ヤンナンネガッタ

(94)［運動をすべきでなかった］運動｛ヤランニェガッタ／ヤランネガッタ｝

(95)［運動をすべきだろう］運動｛ヤンナンネー／ヤンナンネベナー｝

7　喜多方の「ベ」のまとめ

福島県会津平方言のうち、喜多方市で行った調査からわかったモダリティ形式「ベ」の文法的特徴は、以下の5点にまとめられる。

(ア)　形態：「ベ」は異形態の「ペ」や延伸形の「ベー」はあるが、活用はない。ただし終助詞と融合したと考えられる「ベシタ」という形式がある。

(イ)　生起する環境：用言終止形接続を主とし、名詞述語文や形容動詞述語文のときは「ダ」を介する。形容詞接続については部分的にカリ活用連体形接続が老年層に残っている。主に主節末で用いられ、従属節では原因・理由節（ガラ）や逆接節（ゲンジョモ）などの文的独立性の高いものにのみ生起する。連体節では使われない。否定形式や過去形式が後接することもない真正モダリティ形式である。

(ウ) 意味1：「べ」は推量表現と意志表現の両方に用いられる。「べ」に価値判断（当為評価）の用法はない。

(エ) 意味2：否定推量・否定意志表現には「マイ」由来の「メー」を用いず、否定形式を用いた分析的な表現をとる。

(オ) 意味3：確認要求表現から拡張したと考えられる、推量の意味枠組みから逸脱した用法がある。また、勧誘表現の拡張と考えられるexclusive勧誘用法（命令表現的用法）がある。

これらのうち（オ）については、他方言の推量表現形式や意志表現形式でも同様の意味・機能の拡張が起こっているか、興味を引かれる。他方言の対照は今後の課題としたい。

注

⑴ 1997～1998年当時、筆者は推量表現や意志表現について喜多方市で面接調査を行った。このようにして得たデータをもとにした喜多方の「べ」についての文法記述を2004年提出の博士論文の第7章第1節とした。稿末の付記を参照されたい。

⑵ 1998年10月には、筆者の作成した調査票で、日高水穂氏に追加調査の一部をしていただいた。そのデータも記述に使用している。

⑶ 「ッカ」は「-くは」由来の古い仮定形だといい、「忙シッカ手ツダーゾエ」のように盛んに使うという（菅野1982：386）。

⑷ 宮城県宮城郡根白石村の例を日本放送協会編（1981:149）より示す。「センダェーマ　オジョーカサ　イッタンダベトキニ　ヤッパリ　アンタガタ　アタリガ　ナンツカングレーデ　コー　アルッタモンダカネー（仙台　まあ　お城下へ　行ったことがあっただろう、そのときにやっぱり　あなたがたなどは　何時間ぐらいで　歩いたものですか。）」（1907年生まれの男性の発話、1953年収録）

⑸ 価値判断（当為評価）の表現形式「ヤンナンネー」はいわゆる擬似モダリティ形式であり、テンスの分化したヤンナンネガッタ（過去）などの形態変化がある。

⑹ 「全文検索システムひまわり」を使用し、青空文庫コーパスで用例を得た。コーパスの作品IDは004366、『踊る地平線』副題は「02　テムズに聴く」である。

⑺ 菅野（1982：396）に、福島県中通り地方の信達方言で用いられる丁寧の助詞「エ」の後には「主張・問い返しの「シタ」」か「ハー」くらいしか付かないとの記述がある。このほか、秋田県にみられる「シャ」や「ッタ」（ベッタ）（佐々木1999）、仙台周辺にみられる「ベッチャ」、宮城県南部（白石市など）の「ベッサ」などとの関連から、終助詞「シタ」・「シャ」・「チャ」・「サ」の類のものが融合したものかもしれない。しかし、例えば秋田の「シャ」は命令形に後接可だが、喜多方の「ベシタ」を「べ」と「シタ」とに分解したとしても、「シタ」は「べ」にしか後接せず、「シタ」を命令形に付けることはできないという。

⑻　1997年6月の喜多方での調査結果による。なお「ベシタ」は山形市などでも多く用いられている形式だが、山形市のインフォーマント（1997年調査時、20代女性）の内省によると、現在は主に中年層の女性が用いるということである。渡辺（1974）の報告も考え合わせると、山形市の「ベシタ」はある時期に主として女性の間に広まった比較的新しい形式なのかもしれない。

⑼　白岩広行氏にご教示いただいた。こうした「ベ」の用法は若年層に特有のものではなく、福島県では伝統的に使われてきたものだという。

⑽　なお、秋田市方言などでは、独り言や意志の表明、「～と思う」埋め込みや申し出の表現にも動詞終止形が用いられる。

⑾　仁田（1991：213）は、こうした表現を「やわらげた命令」と呼んでいる。

【参考文献】

浅尾いずみ（2001）「鳥取市方言における文末詞ガー」『阪大社会言語学研究ノート』3

朝日祥之（2001）「名古屋市方言における文末詞「ガ」」『阪大社会言語学研究ノート』3

飯豊毅一（1962a）「方言の分布―推量表現ベについて』『相模女子大学紀要』13

――――（1962b）「意志推量を表わすベーについて』『国語国文学試論』6-7

井上史雄（1985）「現代東日本のベイの分布と変化」『新しい日本語―《新方言》分布と変化―』明治書院

加藤正信・半沢洋子・佐藤和之（1980）「会津地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』17

佐々木雅典（1999）「秋田県横手・平鹿方言の終助詞「シャ」の意味分析」『秋田大学ことばの調査』1

菅野宏（1982）「福島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4　北海道・東北地方の方言』国書刊行会

菅野宏・飯豊毅一（1967）「言語生活」『福島県史』24

国立国語研究所編（1981）『国立国語研究所資料集（10-5）方言談話資料（5）』秀英出版

国立国語研究所編（1994）『方言文法全国地図　第3集』大蔵省印刷局

小林隆・勝又琴那（2022）「感動詞「ナンダベ」の用法と地理的分布」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』ひつじ書房

瀧川美穂（1998）「「ベー」の年代差」科学研究費補助金基盤研究（B）「宮城県における伝統的方言体系の記述とその変容についての研究」研究成果報告書『宮城県中新田町方言の研究』

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5

玉懸元（1998）「『ベー』の用法」文部省科学研究費補助金基盤研究(B)「宮城県におけ

る伝統的方言体系の記述とその変容についての研究」研究成果報告書『宮城県中新田町方言の研究』
――――（2001）「宮城県仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用法」『国語学』205
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
日本放送協会編（1981）『全国方言資料　第1巻東北・北海道編』日本放送出版協会
舩木礼子（1999）「意志・推量形式「ベー」の対照―用法変化の推論―」『待兼山論叢』33
松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1
――――（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89
宮崎和人（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『モダリティ』くろしお出版
渡辺信八郎（1974）「「べした」という方言」『山形方言』11

【謝辞】

1997～1998年に福島県喜多方市の臨地調査でお世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。

また、当時の調査にご協力くださった日高水穂氏、福島県の方言ネイティブとしてコメントをくださった白岩広行氏にも、改めて感謝申し上げます。

【付記】

本稿は、筆者が大阪大学に2004年に提出した博士論文『日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究』（未公刊、著者名：橋本（舩木）礼子）のうち、第7章第1節を大幅に加筆修正し、2023年の研究をふまえてまとめ直したものである。なお、博士論文の要旨は大阪大学学術情報庫OUKAでPDFファイルが公開されている。

ハンドルURL　https://hdl.handle.net/11094/45704（2023年12月28日.時点）

なお、本稿はJSPS科学研究費補助金20H00015の研究成果の一部である。